群教セ	G02 － 03
	平18.232集

社会的思考力の向上を目指す学習指導の工夫

── 歴史的分野における因果関係図の作成と活用を通して ──

長期研修員Ⅱ　　宮内　国大

《研究の概要》

本研究は、中学校社会科の歴史的分野において因果関係図の作成と活用により思考力の向上を目指すものである。具体的には、「つかむ」「追究する」「まとめる」のそれぞれの学習過程において、資料で根拠付けながら課題を追究し、因果関係図を作成する。そして、作成した因果関係図を基に歴史的事象の因果関係や資料の根拠付けを相互交流することで多面的・多角的に考察し、思考力の向上を目指す指導の工夫を行った。

Ⅰ　研究の概要

1　基本的な考え方

中学校社会科の歴史的分野では、教師の説明や発問を中心とする一問一答式の一斉授業になる傾向がある。その結果、生徒は、歴史学習を暗記する学習と思いがちになり、資料から課題を見いだしたり、その意味や特色を読み取ったりして考察する力が十分育っていないと考える。また、歴史に興味・関心があり意欲的に取り組む生徒でも、歴史の大きな流れに影響する複数の歴史的事象の因果関係や各時代の特色などをとらえることを難しくしていると考える。

そこで、課題解決的な学習過程を設定し、歴史的事象の因果関係を多面的・多角的に追究しながら、原因→経過→結果などの因果関係を表す図を作成することで、政治の展開、産業の発達、社会の様子、文化の特色などを総合的にとらえることができると考える。また、このことが生徒一人一人の社会的思考力の向上に結び付くと考える。

(1)　歴史的分野における社会的思考力

歴史的分野における社会的思考力とは、歴史的事象から課題を見いだし、その意義や特色、相互の関連を多面的・多角的に考察する力である。

(2)「多面的・多角的に考察する」とは

歴史的分野の社会的事象を様々な要素・領域などから主体的に考察したり、社会的事象同士を比較・関連・総合させて考察することである。

(3)　歴史的分野における社会的思考力を向上させるために

本研究では、歴史的分野における社会的思考力を向上させるために、課題解決の学習過程に以下のような学習活動を取り入れる。

①　「つかむ」過程
・教師が提示した資料を基に、生徒が歴史的事象から単元を通した中心課題を見いだす活動。 ・見いだした中心課題について、因果関係を予想する活動。 ・予想を確かめるための計画を立てる活動。
②　「追究する」過程
・計画に基づいて各歴史的事象の原因→経過→結果の流れを考える活動。
③　「まとめる」過程
・複数の歴史的事象の因果関係を総合して時代の流れや特色を考える活動。

2　内容及び方法

(1)　研究の手だて

①　「つかむ」「追究する」「まとめる」のそれぞれの過程において、歴史的事象を追究するための『因果関係図』を作成し、歴史の流れをとらえ、自らの考えを根拠付けられるようにする。

②　各過程で作成した『因果関係図』を自ら関連付けたり、友達と互いの因果関係図を基に交流させたりして、歴史的事象を多面的・多角的にとらえられるようにする。

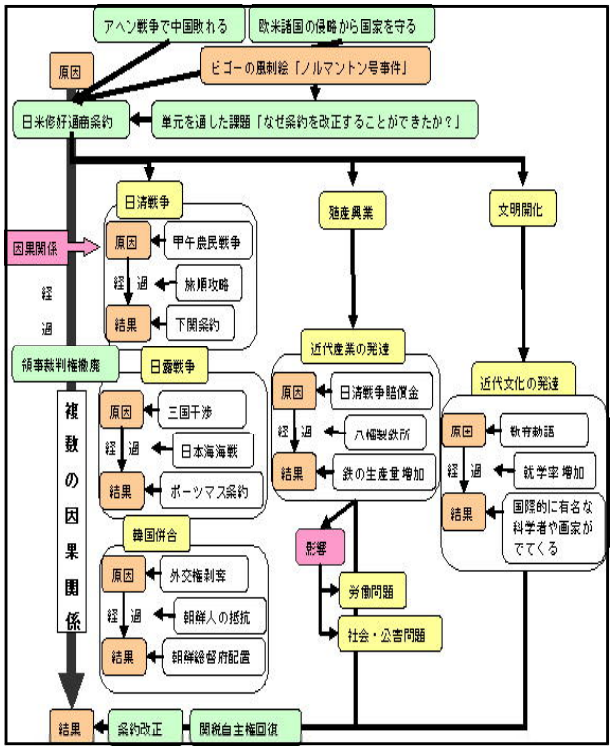


図１　因果関係図例（「まとめる」過程）

(2)　因果関係図とは

歴史的事象には原因→経過→結果という一連の流れがあり、その結果が他の事象の原因となる場合が多い。単に年表を見て学習するだけでは、生徒が歴史的事象のつながりや歴史の大きな流れを理解することは困難である。そこで、単元を通した中心課題を設定し、歴史的事象の原因からその結果に至るまでを原因→経過→結果と根拠付ける資料と考えを順番に配置し、矢印で結び付けたものである。

作成する因果関係図（図１）は、以下のように課題解決の学習過程に応じて作成し、活用するものである。

①　「つかむ」過程における因果関係図
○「課題を設定する」場面において、提示した資料から中心となる歴史的事象の課題を見いだし、原因→経過→結果を追究しようとする意識を高める。 ○「予想する」場面において、課題の原因→経過→結果を予想し、確かめる計画を立てる。
②　「追究する」過程における因果関係図
○予想した複数の歴史的事象を計画に沿って、原因→経過→結果の流れを追究することで、資料と自らの考えで根拠付けることができるようになる。そして、中心となる歴史的事象の因果関係とのかかわりを考察し、因果関係図を作成する。
③　「まとめる」過程における因果関係図
○作成した因果関係図を基に、中心となる課題にかかわる歴史的事象の因果関係を総合した因果関係図を作成し、その時代の大きな流れや特色を考える。

(3)　因果関係図を作成するための資料活用

歴史学習は、そのほとんどが歴史的事象に実際に触れ、直接確認することが難しい学習である。このような性格をもつ歴史学習では、資料が生徒の思考や判断を深め発展させていくための具体的な手がかりを与えることが重要なこととなる。

このようなことから、因果関係図を作成する際、原因→経過→結果を示す史実に基づいた資料が必要となる。さらに、自分が選んだ資料と考えを根拠付ける記述で、より歴史的因果関係を理解できると考える。

そこで、各過程において生徒が因果関係図を作成する際、政治・経済・文化など幅広く、生徒が触れられるような図やグラフ、写真などを用意し、生徒自らが主体的に選択し、因果関係図の作成に役立てるようにした。

因果関係図に資料を貼り付けるに当たって、コンピュータで作成できるよう、資料をファイルしておき、生徒が選択して活用するようにした。

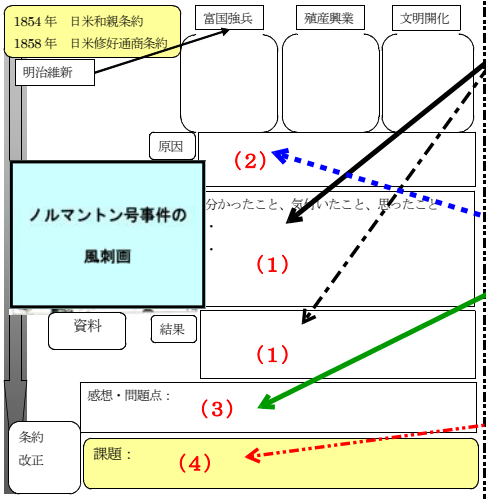
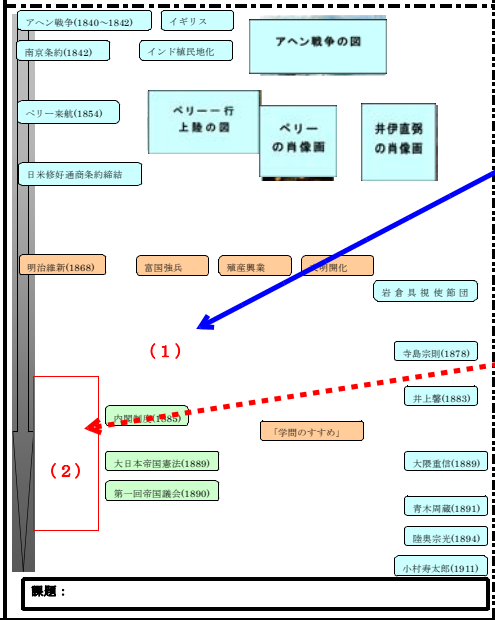
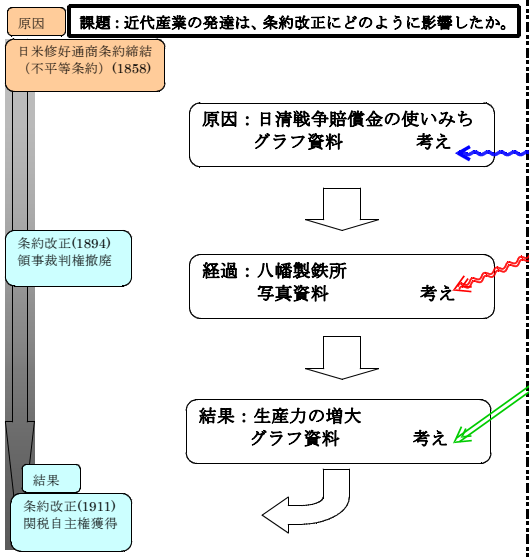
(4)　因果関係図の活用方法

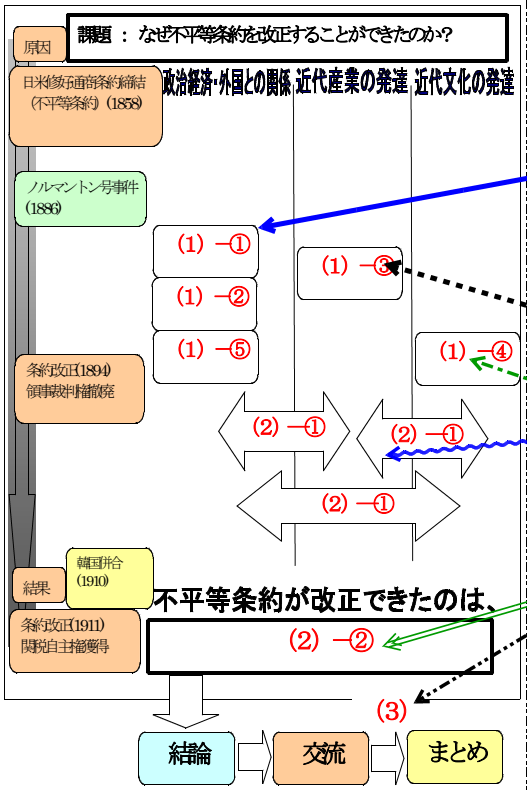
生徒が個々に考察し作成した因果関係図をもち寄って交流し、情報を交換することで、自分の考えを修正したり、補強したり、考え直したりする。交流・情報交換した後、友達の意見や考え、自分に対する意見や質問の中で特に印象に残ったことを因果関係図に書く。友達との考えや意見の交流が自分の考えをどのように変化させたのかを振り返ることで因果関係図をよりよいものにできる。

学習過程ごとに以下のような活動を行う。

①　「つかむ」過程
○提示した資料から読み取れたことを生徒相互に交流させ単元の中心課題を見いだす。中心課題の歴史的事象に影響を与えたと予想される複数の事象を追究する見通しをもつ。
②　「追究する」過程
○予想した複数の歴史的事象の因果関係図を作成した後に、友達同士で利用した資料や考えを交流することで自分の因果関係図を修正する。
③　「まとめる」過程
○作成した因果関係図を展示して、互いに見合ったり、意見交換をしたりして自分の因果関係図を完成する。

(5)　因果関係図の作成方法と活用方法

過程	場面	因　果　関　係　図	作　成　方　法	活　用　方　法
つかむ	課題の設定	**【つかむ過程における因果関係図】** 生徒が書き込む前の関係図  	**1　単元の中心課題を設定するための因果関係図を作成する。** (1) 提示資料（「ノルマントン号事件の風刺絵」）を見て分かったことや気付いたこと、事件の結果を調べ記入する。 (2) 事件の原因を記入する。 (3) 事件の内容や結果、原因から、感想や問題点について記入する。 (4) 設定された本単元の中心課題を記入する。	(3) 感想や問題点について記入したことを交流し、出た意見を絞り込んで中心課題を設定する。
	予想	 	**2　単元の中心課題を解決するための予想をし、見通しを立てる因果関係図を作成する。** (1) ノルマントン号事件以後、なぜ条約を改正することができたのか、結論を導き出すための予想を空きスペースに記述する。 (2) 中心課題の結論を導き出すために、歴史的因果関係追究の視点を政治経済、外国との関係、産業や文化等に絞り込み、予想（具体的にどのような事象を調べるか）を確かめる計画を立て見通しをもつ。	(1) 記述した予想を基に、生徒相互に結論を導き出すための交流をする。 (2) 絞り込んだ視点や記述し立てた計画、見通しを交流し振り返る。他者の考えや意見を基に、自分の計画や見通しの修正をする。
追究する		**【追究する過程における因果関係図の作成】** （例：「近代産業の発達」の因果関係図）  	**3　単元の中心課題に影響する政治経済、外国との関係、産業、文化の因果関係を調べ因果関係図を作成する。** (1) 中心課題に影響する個々に追究する因果関係図は 原因 → 経過 → 結果 をとらえる図であり、それぞれの因果関係図には、根拠となる資料と自分の考えを記述する。 （今回の追究例） ①日清戦争の勝利 ②日露戦争の勝利 ③近代産業の発達 ④近代文化の発達 ⑤韓国併合	(1) ①～⑤でそれぞれ作成した因果関係図を基に原因→経過→結果を根拠付ける資料や自分の考えを各時間ごとに交流する。 ↓ 他者の意見を参考に自分の因果関係図の資料や考えを振り返り修正する。

まとめる	**【まとめる過程における因果関係図の作成】** ＜例：まとめの因果関係図＞  	**4　3で作成した個々の因果関係図を1枚の因果関係図に集約し、中心課題の結論を出す。** (1) 視点ごとに因果関係を集約する。 ◎政治経済・外国との関係 ①日清戦争の勝利 ②日露戦争の勝利 ⑤韓国併合 ◎近代産業の発達 ③近代産業の発達 ◎近代文化の発達 ④近代文化の発達 (2) ①歴史の流れや政治経済、外国との関係、産業、文化とのかかわりを比較・関連・総合する。 ②中心課題の結論を導く。 (3) 作成した因果関係図と導き出した結論を基に生徒相互で多面的・多角的な考えを交流し自分の結論を因果関係図にまとめ直し、完成する。	(3) 作成した因果関係図を基に個人で導き出した中心課題の結論を他者と交流する。 生徒相互の結論について質疑を行い、多面的・多角的な考えや意見・感想を交流することで条約改正の流れをつかみ単元のまとめをする。

2　研究の方法

(1)　授業実践計画

教　科	社会科（歴史的分野）	単　元	「条約改正」（日清･日露戦争と近代化）
対　象	沼田市立多那中学校２年生　10名	期　間	平成18年９月25日～10月６日（８時間）

(2)　抽出生徒

A女	歴史的事象には関心が高く、疑問に思ったことや不思議に思ったことを、学級全体に発言し投げかけることができる。また、疑問や課題をもち、予想を立ててインターネットや図書室、資料集などを利用して、調べることができる。しかし、確かめる計画を立てることまではできても、原因→経過→結果の流れを考え、複数の歴史的事象を比較・関連して因果関係を考えたり、総合して時代の流れや特色を考えるまでは至っていない。
B女	歴史的事象には関心が低いが、ある程度の課題を見いだすことはできる。しかし、予想をし、確かめる計画を立て、原因→経過→結果の流れを考えることまでは至っていない。したがって、複数の歴史的事象を比較・関連して因果関係を考えたり、総合して時代の流れや特色を考えたりすることは難しい。

Ⅱ　授業の概要

1　単元名

「条約改正」（日清・日露戦争と近代化）

2　単元の構想

本単元は、明治政府が近代国家の建設を進め、我が国の国際的地位の向上と国力の充実が図られたことや、当時の我が国と大陸との関係のあらましを理解することをねらいとするものである。そのために、不平等な条約を改正できた理由についての中心課題を設定し、日清・日露戦争の勝利、近代産業の発達、近代文化の発達等の事象間に複数の因果関係があり、それらの事象が条約の改正にどのようにかかわっているのかを追究する。

その中で、条約改正を軸とした歴史の大きな流れの中で、関係する歴史的事象の原因から結果に至る経過を根拠付ける資料と考えで因果関係図を作成しながら課題を追究する。このことによって、生徒の興味・関心を引き出し、課題の設定や予想、追究、根拠となる資料を探す能力、歴史的因果関係をとらえる思考力の向上を目指す。

3　目標

(1) 急速に近代化を進めた我が国の国際的地位の向上と大陸との関係のあらましを理解させる。

(2) 日清・日露戦争をめぐる当時の国際情勢や外国の反応、近代産業の発達や近代文化の発達、韓国の植民地化から多角的に条約改正を考察させる学習を通して、歴史的事象を多面的・多角的にとらえる能力と態度を育てる。

(3) 条約改正の因果関係を理解するため、原因から結果に至る経過を示す因果関係図を作成し、自分の考えを資料で根拠付ける能力を付ける。

(4) 作成した複数の因果関係図を自ら関連付け、友達と相互に交流して、歴史的因果関係と歴史の大きな流れをとらえさせる。

4　指導計画　　「条約改正」日清・日露戦争と近代産業（８時間予定）

過程	主な学習活動とねらい	時間	学習への支援	評価項目
つかむ	○明治維新の復習 ○ノルマントン号事件を通して、不平等条約改正に至る中心課題を設定する。	1	○「富国強兵」「殖産興業」「文明開化」。 ○ノルマントン号事件の風刺絵を基に条約改正の中心課題の設定、コンピュータによる因果関係図の作成。	○ノルマントン号事件の絵から条約改正の中心課題を考え、発言している。 【思・判】(観察)
	中心課題：「なぜ、不平等条約を改正することができたか？」			
	○予想・学習計画作成 ・条約改正にかかわる課題を立て、予想し、確かめる計画を立てる。	1	○条約改正に至る因果関係図の作成と資料による根拠付けをコンピュータで入力するよう指示。 ○具体的事象の課題設定、予想と確かめる計画を立てる。	○課題の予想を立て、それにかかわる細かい課題を考えている。 【思・判】(因果関係図)
追究する	課題：「日清戦争で勝利したことは、条約改正にどのように影響したか？」			
	○日清戦争 ・コンピュータによる因果関係図の作成と資料による根拠付け。	1	○朝鮮をめぐる日本と清の争いから日清戦争の原因と結果をつかむ。 ○条約改正への影響と根拠のある資料で因果関係をつかむ。	○因果関係図の作成と資料の根拠付けをしている。 【思・判】(因果関係図)
	課題：「日露戦争で勝利したことは、条約改正にどのように影響したか？」			
	○日露戦争 ・コンピュータによる因果関係図の作成と資料による根拠付け。	1	○日清戦争の結果から日露戦争の原因と結果をつかむ。 ○条約改正への影響と根拠のある資料で因果関係をつかむ。	○因果関係図の作成と資料による根拠付けをしている。 【思・判】(因果関係図)
	課題：「近代産業の発達は、条約改正にどのように影響したか？」			
	○近代産業の発達 ・コンピュータによる因果関係図の作成と資料による根拠付け。	1	○日清戦争の賠償金利用のグラフから近代工業発達の原因と結果をつかむ。 ○労働問題や社会問題について。 ○条約改正への影響と根拠のある資料で因果関係をつかむ。	○因果関係図の作成と資料による根拠付けをしている。 【思・判】(因果関係図)
	課題：「近代文化の発達は、条約改正にどのように影響したか？」			
	○近代文化の発達 ・コンピュータによる因果関係図の作成と資料による根拠付け。	1	○学校教育の普及から近代文化発達の原因と結果をつかむ。 ○条約改正への影響と根拠のある資料で因果関係をつかむ。	○因果関係図の作成と資料による根拠付けをしている。 【思・判】(因果関係図)
	課題：「韓国併合は、条約改正にどのように影響したか？」			
	○韓国併合 ・コンピュータによる因果関係の作成と資料による根拠付け。	1	○「なくなる朝鮮語の学習時間」の資料から韓国併合の原因と結果をつかむ。 ○条約改正への影響と根拠のある資料で因果関係をつかむ。	○因果関係図の作成と資料による根拠付けをしている。 【思・判】(因果関係図)
まとめる	中心課題の解決：「なぜ条約を改正することができたのか？」			
	○中心課題の解決 ・条約改正と事象の因果関係について交流し、コンピュータによる条約改正の因果関係図を完成させ、解決する。	1	○今までの因果関係図を活用し、中心課題を解決する因果関係図を作成させる。 ○「なぜ条約は改正できたのか」生徒が作成した因果関係図と資料による根拠付けを発表し、国際的地位の向上と国力の向上、外国との関係改善などを挙げてまとめとしたい。	○条約改正は日本の国際的地位の向上、国力の充実、外国との関係向上であったことを比較、関連、総合して理解している。 【思・判】【知・理】 (因果関係図)

Ⅲ　実践の概要

1 「つかむ」過程（第１時～第２時）

(1)　第１時、「課題を設定する場面」での因果関係図の作成と活用

①　当時の世界情勢の背景や明治維新での諸改革を確認した後、ビゴーのノルマントン号事件の風刺絵を提示し、まず、気付いたことや疑問に思ったことを記述し、事件の結果を調べ因果関係図に記述した。

② 事件の結果として、イギリス人船長が軽い罰で済んだ理由について調べ、その原因と考えられる不平等条約の締結について調べ記述した。

③ ノルマントン号事件について分かったこと、感想・問題点や感じたことなどを記述した。

④ 感想・問題点や感じたことなどを交流し、「この条約に対する日本人の感情」「当時の明治政府は不平等条約をどのように考えていたか」を考え、中心課題「なぜ不平等条約を改正することができたのか」を設定した。

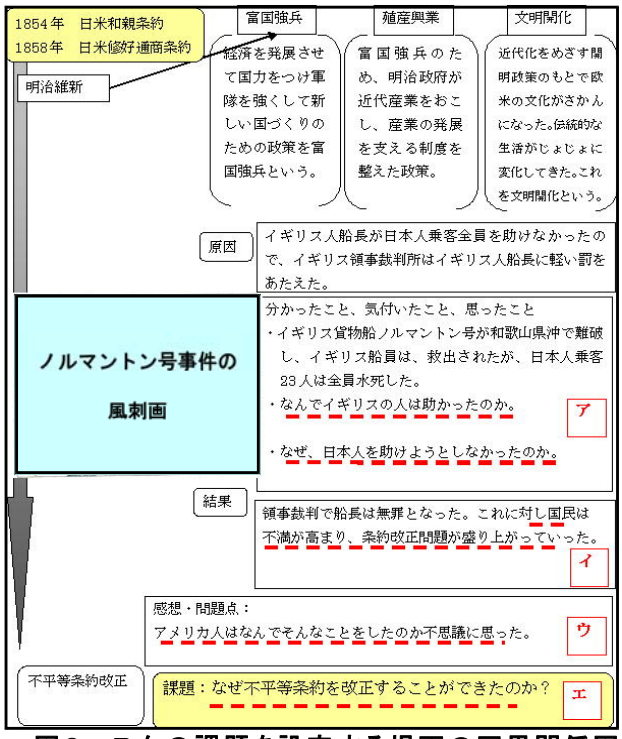


図２　Ｂ女の課題を設定する場面の因果関係図
注：破線及び ア イ ウ エ は筆者

Ｂ女は図２のように因果関係図を作成した。アのようにノルマントン号事件について分かったことや気付いたことでは、事件の事実を調べて記述するとともに、「なぜイギリス人は助かったのか」「なぜ日本人を助けようとしなかったのか」という事件についての疑問を記述した。また、イのように結果では、「国民は不満が高まり、条約改正運動が盛り上がっていった」と記述しており、当時の国民的感情に理解と共感していることがうかがえる。ウのようにこの事件についての感想や問題点として「アメリカ人はなんで日本人にそんなことをしたのか不思議に思った」と記述し、幕末に結んだ日米修好通商条約がこの事件の大きな原因となっていることに目を向けていることが分かる。当時の国民的感情に生徒が共感する形で、生徒が個々に考え記述した問題点や感想を交流して絞り込み、中心課題「なぜ不平等条約を改正することができたのか」を設定することができた。

エのように課題について、Ｂ女ははじめ「どのように不平等条約を改正したか」と記述していたが、交流の後、「なぜ、不平等条約を改正することができたのか」と中心課題を訂正した。交流することによって個人では不安だった課題をより自信をもったものにすることができ、全員で取り組む課題を設定するのに効果的であった。

歴史的事象の原因、結果、気付いたことを調べるという学習の流れが分かっていたので、歴史的因果関係を追究しようとする意識を高めることができ、因果関係図の作成へもスムーズに入れた。

(2)　第２時、「予想する場面」での因果関係図の作成と活用

① 前時に設定した中心課題の予想をする。

中心課題の予想として、「どうしたら外国に条約改正を認めさせることができるか」「日本がどのような国になることで、外国が条約改正を認めるか」という発問をした。その結果、「日本が先進国に近付いたから外国に認められた」「日本が外国に負けない力をつけたから外国から認められた」という予想が出された。

② 予想を具体化し、条約改正に影響を与えた歴史的事象を見いだし、確かめる計画を立てる。

予想をさらに具体化するために「日本が先進国に近付いた」「日本が外国に負けない力をつけた」に関係すると思われる歴史的事象を年表から探す活動を行った。その結果、「日清戦争の勝利」「日露戦争の勝利」「近代産業の発達」「近代文化の発達」「韓国併合」の５つが条約改正に影響を与えた歴史的事象として集約された。その５つの歴史的事象の因果関係と条約改正にどのような影響を与えたかを調べる計画を立てた。

Ａ女は図３のアのように、「1893年　陸奥宗光の条約交渉が始まった。」と記述している。これは、ノルマントン号事件で問題となった不平等条約のうちの「領事裁判権の撤廃」を実現した人物として記述していることが分かる。不平等条約を改正するには、条約を結んだ外国との間で改正交渉をしなければ実現しないという考えであった。

イのように、予想したことが中心課題にどのように影響したかを確かめるために、国外・国内で起きた複数の歴史的事象を具体的に記述した。

Ａ女を含めノルマントン号事件以後の事象を記述した生徒が多かった。中には大日本帝国憲法の制定を追究したいという意見も出たが、既習内容なので先に挙げた５つの歴史的事象を確かめることにした。

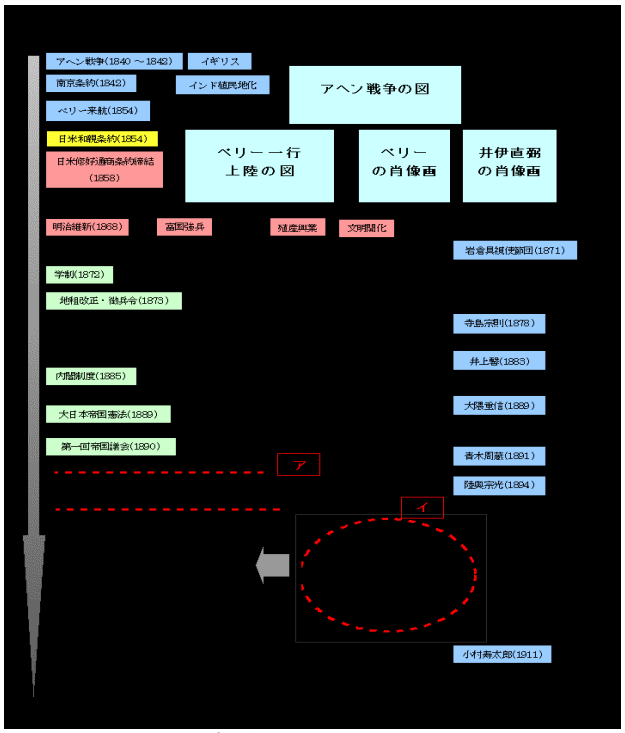


図３　Ａ女の予想する場面の因果関係図
注：破線及び ア イ は筆者

Ａ女は、関心をもって学習に取り組んでおり、歴史的事象から気付いたことや不思議に思ったことから疑問や課題をもつことができる。学級全体に自分の疑問や課題を投げかけることができるので、予想についても、予想を確かめる計画についても、他の生徒と交流することによって自分の考えに自信をもつことができた。また、個々に予想をして考えたことを相互に交流し情報を交換することで、自分だけでは考えが及ばない生徒も因果関係図に予想や予想を確かめる計画を記入することができた。

２　「追究する」過程（第３時～第７時）

（1）　因果関係図の作成

条約改正に影響を与えた５つの歴史的事象の因果関係を資料と自らの考えで、因果関係図を作成した。

①	**日清戦争**	
	原因	甲午農民戦争
	経過	日清戦争で勝利したこと
	結果	下関条約締結
②	**日露戦争**	
	原因	日本とロシアの満州をめぐる対立
	経過	ロシア国内の暴動「血の日曜日」
	結果	ポーツマス条約締結
③	**近代産業の発達**	
	原因	日清戦争賠償金の使いみち（グラフ）
	経過	八幡製鉄所溶鉱炉
	結果	鋼材生産増加（グラフ）
④	**近代文化の発達**	
	原因	教育勅語（文書資料））
	経過	夏目漱石、坪内逍遙など多くの作家が現れた。
	結果	横山大観、北里柴三郎など世界に認められた作家や学者が現れた。
⑤	**韓国併合**	
	原因	ポーツマス条約により朝鮮の支配権を手に入れ、外交権を奪い、軍隊を解散させたこと。
	経過	その影響として解散させられた兵士や農民たちが武器を持って日本軍と戦たこと、強制的に日本語を教えられ、朝鮮史を教えることを禁止されたことを取り上げている。
	結果	朝鮮総督府を設置して韓国を併合することになった。

Ｂ女は図４の ア のように、日清戦争の原因を「朝鮮で起こった甲午農民戦争をきっかけに日本と清の両国が出兵し日本の奇襲攻撃で戦争になった。」

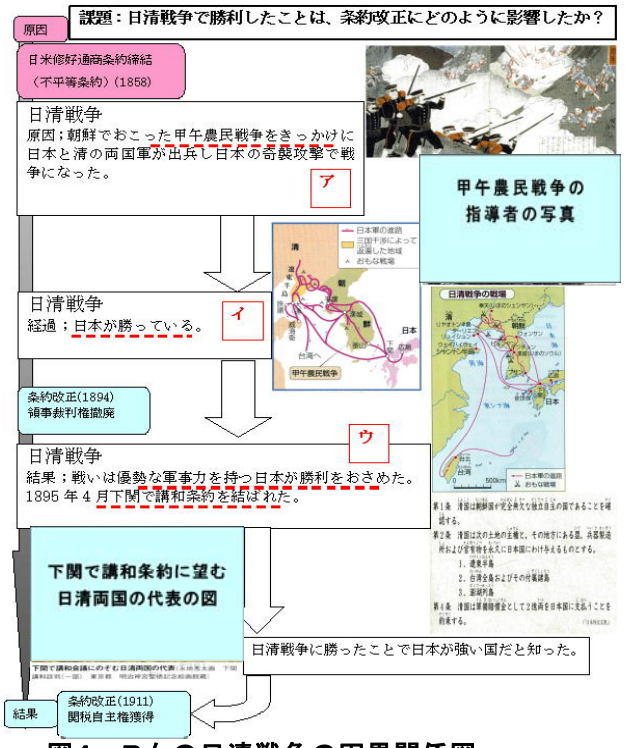


図４　Ｂ女の日清戦争の因果関係図
注：破線及び ア イ ウ は筆者

と記述している。朝鮮をめぐる日本と清の対立から甲午農民戦争をきっかけに日清戦争が始まったことをＢ女は原因と考え、資料も日本軍が朝鮮の

東学を信仰する農民に攻撃している絵を資料として取り上げている。イのように経過では、「日本が勝っている」と記述し、日本軍の進軍経路を示す朝鮮半島から清までの地図を取り上げている。根拠付ける資料が少ないこともあり、日本の勝利の経過を表現する記述が少ない。ウのように経過では、「優勢な軍事力をもつ日本が勝利をおさめた」「1895年4月下関で講和条約を結んだ」と記述している。「眠れる獅子」と言われた清がアジアの小国日本に敗れたことで、実際には清の方が圧倒的な軍事力を持っていたことは理解していない。教科書や資料集の説明から詳細が分からないので、圧倒的な軍事力と記述していた。選択した資料は、日清戦争の終結を表す下関講和会議の様子と条文を取り上げている。

(2)　因果関係図の活用

本単元の中心課題である「なぜ不平等条約を改正することができたのか」に影響する政治経済・外国との関係、産業の発達、文化の発達の因果関係を多面的・多角的にとらえられるように、原因→経過→結果をそれぞれ根拠付ける資料と自らの考えを記述しながら因果関係図を作成した。

その時に、生徒がこれと思った資料をじっくり探し、考えを記述できるように、因果関係にかかわる資料を豊富に準備しておくことが大切である。何が原因で何が結果なのか資料を多面的・多角的に資料を選ぶことで思考をし、根拠付ける自らの考えを記述することでも思考をするからである。

初めて中心課題に影響する因果関係図を作成する学習だったので、Ｂ女は、資料や教科書を読んでいたが、原因から結果までの流れを表すことができずにいた。そこで、交流をして選択した資料や原因→経過→結果など情報を交換すると因果関係図の作成の方法が分かったようで、Ｂ女なりに資料を選択し根拠付ける自分の考えを記述するようになった。

Ｂ女のように比較的関心も低く、因果関係を考えたり、時代の流れや特色を考えることが苦手な生徒でも、自分の考えを資料で根拠付ける因果関係図を作成することで、原因から結果まで、多面的・多角的に追究できたということは、効果的であったと言える。また、自分の力だけではどんな資料を選択し、因果関係をどのように根拠付け記述したらよいか分からないＢ女にとって、因果関係図を作成し、友達と交流して情報を交換することは、自分の選択した資料や考えに自信をもったり修正するのにとても効果的であったといえる。

3　「まとめる」過程（第8時）

前時までに予想を確かめた５つの課題が、「条約改正」にどう影響しているかを一つの因果関係図にまとめ、複数の歴史的事象の因果関係を総合して時代の流れや特色を考える活動を行った。

(1)　因果関係図の作成

５つの課題の追究から、不平等条約を改正できた理由としてＡ女は、条約改正の理由をまとめの因果関係図に「外国に認められた。国際的地位が向上した。国力の充実。外国との関係向上。」と記述している。

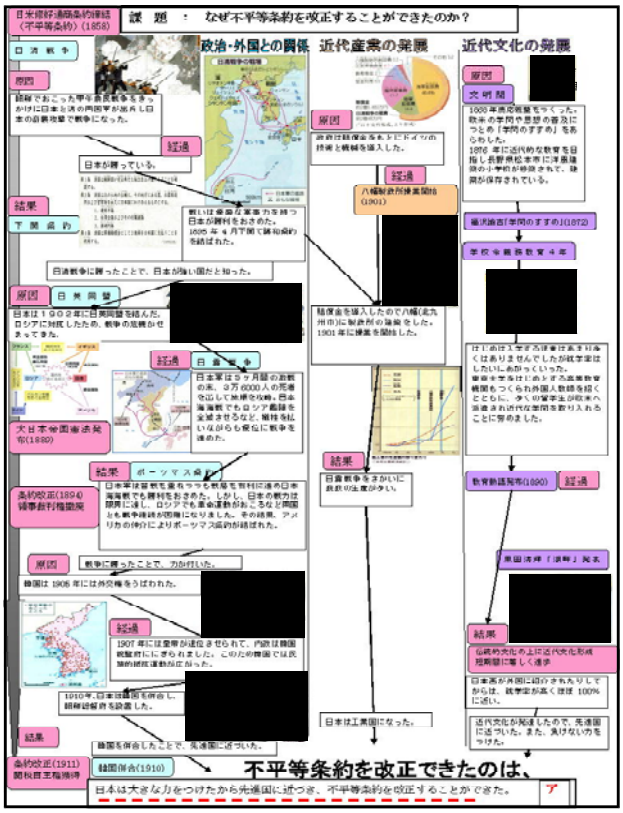


図５　Ｂ女のまとめの因果関係図
注：破線及び ア は筆者

全体的には、多少の並べ間違いはあったものの時系列に従ってほぼ仕上がっていた。

Ｂ女は図５のアのように、不平等条約を改正できた結論として、「日本は大きな力をつけたから先進国に近付き、不平等条約を改正することができた。」と記述している。「大きな力」とは、「日清戦争での勝利」「日露戦争での勝利」「八幡製鉄所を中心とした近代産業の発達」「世界に認められた芸術家を生み出した近代文化の発達」「朝

鮮総督府を置いて統治した韓国併合」を意味している。

図５の因果関係図は、中心課題に影響する複数の因果関係を「政治・外国との関係」「近代産業の発達」「近代文化の発達」の視点でまとめ、時代の流れに合わせて総合することができた。このようにまとめることで、中心課題を追究した複数の因果関係図で比較・関連・総合して時代の大きな流れや特色を考え、結論を導くことができる。

(2)　因果関係図の活用

複数の因果関係図を１つにまとめた後、交流することにより追究してきた複数の歴史的事象の比較・関連・総合の仕方にＢ女が自信をもって記述した自分の結論を発表することができた。

Ｂ女にとってまとめの因果関係図を作成することは、「一つ一つのことを原因→経過→結果とまとめて、自分の見やすい形にできて分かりやすかった」と自己評価カードに記述しているように視覚的に理解しやすかったと言える。また、交流することによって、友達の意見や考えを聞いたり、自分の作成した因果関係図に対して批評してもらうことで、自信をもてるようになった。

(3)　中心課題「なぜ、不平等条約を改正することができたのか」についての結論

これまでの追究結果を総合して、原因→経過→結果を盛り込んで、中心課題の結論として短い文章でまとめた。Ａ女とＢ女は結論を次のように記述している。

弱かった日本が、日清戦争・日露戦争に勝ったことで、強くなった。そして、この戦争で得た賠償金で軍隊の拡大、そして工場などを作り、産業の面でも成長した。
また、義務教育の年数が増えて学校へ行く子どもがほぼ100%になった。そして、日本全体の学力が上がり、学者や作家、画家の中から外国に認められる人が多くでた。
さらに、韓国を併合したことでより先進国に近づいた。
しかし、その一方で税金や労働時間の増加など、国民の負担は重くなっていた。

図６　A女結論の記述

日清戦争は、アメリカと日本の戦争で日本が勝ち下関条約をむすんだ。
日露戦争は、ロシアと日本の戦争でなんとか日本が勝った。そのために日本は力をつけた。近代産業の発達で、鉄工業と生糸のせいさんがたかくなり、日本は、さん業国になった。近代文化の発達で小学校をつくりぎむきょういくをつくった。生徒の人数もだんだんに多くなった。韓国併合は、日本は、韓国を併合し日本はもっともっとつけた。せいしん国にちかづき日本は、力をつけた。

図７　B女の結論の記述

いつもとは少し違ったやり方だったので、少しむずかしかった。
自分で調べてまとめるので、自分でよく考えて調べることができた。
ノートではあまりおぼえられなそうだったけど、これならちゃんと流れをおぼえることができた。

図８　A女の因果関係図を作成することについての感想　　**注：破線は筆者**

Ａ女は、意欲的で関心も高く、歴史学習に対して疑問や課題を計画的に調べることができる。しかし、歴史の大きな流れや歴史的事象の原因→経過→結果の流れを、比較・関連・総合して時代の特色を考えることまではできなかった。因果関係図の作成では、根拠付ける資料を豊富に選択し自らの考えを記述していたこともあり、資料活用能力と思考力は向上していると考えられる。

Ｂ女の因果関係図は、見付けた資料と自分の考えで根拠付け、すべての因果関係図に原因から結果まで分かりやすく矢印が記述されていた。結論の記述からは、日清戦争の日本の対戦国を理解できていなかったが、今回の因果関係図を作成する学習で思考力は向上していると判断できる。

本研究で中心課題に影響する複数の歴史的事象の因果関係図を作成することにより、豊富な資料の中から因果関係を根拠付ける資料を取捨選択する資料活用能力が向上した。また、資料とともに根拠付ける自らの考えを記述することで思考力も向上していると考える。

Ａ女の感想に「自分でよく考えて調べることができた。」「(時代の)流れを覚えることができた。」と記述されていた。

Ｂ女は、歴史的事象に関心が低く、歴史的事象から他の生徒が見いだす課題に同調する程度だろうと考えていた。自主的には課題を立てることはできなかったが、予想を立て見通しをもつところから意欲的になり、見付けた資料と自分の考えで根拠付け、すべての因果関係図に原因から結果まで分かりやすく記述されていた。まとめの因果関係図（図５）では、追究してきた複数の因果関係図を視覚的に比較・関連・総合して時代の流れを理解しやすいように作成されている。

このようなことから、Ａ女のように意欲的で関心の高い生徒には、歴史学習をより主体的に取り組み、視覚的な因果関係図を作成しながら思考力を向上させる学習へと発展することができる。また、Ｂ女のように関心が低く、あまり課題意識をもてない生徒には、興味や関心をもたせることができる。さらに、歴史の大きな流れを中心課題に設定することで影響する複数の歴史的事象を追究する方法を学ぶことができる。そして、因果関係を裏付ける資料を取捨選択し、自らの考えを根拠付けながら因果関係図を作成することで、思考力を向上させる学習となったと考える。

Ⅳ　研究のまとめ

１　成果

＜因果関係図の作成について＞

○　条約改正に影響する５つの歴史的事象を因果関係図を作成して確かめることで、複数の歴史的事象を比較・関連し、歴史の大きな流れや時代の特色を考える力を向上させることができる。

○　歴史的因果関係の原因→経過→結果を根拠付ける資料を追究しながら生徒自らの考えで因果関係図を作成することで、資料の取捨選択や思考力を働かせて主体的に学ぶ学習ができる。

＜因果関係図の活用について＞

○　「つかむ」「追究する」「まとめる」の各過程で作成した因果関係図を生徒が自ら関連付け、友達と相互に交流することで歴史的事象を多面的・多角的にとらえる上で効果的である。

○　因果関係図の作成は、グループで作成した方が課題の設定の面でも、追究する面でも能率がよいと共に、個々の意見を交流させて資料の選択や根拠のある考えをまとめることができる。

２　課題

○　本研究では、因果関係図を歴史的事象を追究するごとに１枚ずつ作成したが、生徒への負担を考慮すると、中心課題に影響する複数の歴史的事象を追究する計画に併せてなるべく絞ることも考えられる。また、生徒に追究の分担をさせ、まとめの過程で交流しながら中心課題の結論を見いだす因果関係図を作成するようにすると建設的な意見も多く出ると考える。

○　今後、教師主体の講義形式から脱却し、生徒がより主体的に調べ考えながら因果関係図を作成するためには、歴史的事象の原因→経過→結果を生徒が取捨選択する資料の提示の仕方をさらに工夫したり、中心となる課題を教師が十分構想することが大切であると考える。

Web検索キーワード

【 社会　歴史　社会的思考力　因果関係図　根拠付け　課題解決 】

【引用文献・主な参考文献】

・　澁澤　文隆 編　　『中学社会科のリニューアルと授業デザイン』　明治図書（2002）

・　沖縄県立総合教育ｾﾝﾀｰ研究集録　　第34･35･38集(2004、2005)

・　高野 尚好　石栗 正夫 編　　『目で学ぶ楽しい歴史学習』　教育出版(1990)

・　社会科授業改善研究会著　　『中学社会科授業のリ・デザイン』　東洋館出版（2002）

・　岩手県立総合教育センター教育研究　（1999、2000）

【資料の出典】

・　東京法令出版株式会社「ビジュアル歴史」より『日清戦争の展開』『下関条約(1895年』『賠償金の使いみち』『日ロ戦争直前の国際関係』『日露戦争の展開』

・　財団法人紙の博物館より『帝国陸軍大勝利』

・　有限責任中間法人教学図書協会より『鉄工業の生産額の移り変わり』『日本の韓国併合に対する朝鮮民衆の抵抗運動』『日清戦争の戦場』

（担当指導主事　峯岸　哲夫）